

中央大学理工学部

電気工学科同窓会々誌

第 19 号

発行元 〒112
東京都文京区春日 1-3-27
中央大学理工学部電気工学科
TEL. 03-813-4171(内)531

あいさつ

会長 吉江 実成彦

同窓生の皆様には益々ご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。

昨年の総会・懇親会は、増改築のなりました理工学部の五号館を会場にして、七月四日に開催されました。懇親会には、初期の電気工学科主任教授の重任をお務めになりました広瀬先生をお招きして、約百人の同窓生が楽しい集いになりました。約一割の方々がご同伴で出席され、図書館、室内体育館、学生実験室などを見学し、学生時代を偲んでおられました。

ここで、この誌面をお借りして、昨年度の常任幹事会の主な活動を報告しますと

- 一、電気工学科四年生との懇談会の開催
 - 二、中堅層の先生方に同窓会への交流をお願いするため、同窓会役員との懇親会の開催
 - 三、同窓会の運営を継続発展させるために、新入会員の入会金（終身会費）の値上げ討議
 - 四、昭和五十九年の中大百年祭に当り、同窓会事業の継続審議などが挙げられます。これらは、何れも同窓会皆様の絶大なるご協力があったこそ、目的が達成されるもので、よろしくお願い申し上げます。
- さて、来る七月三日（土）、東京西新橋の航空会館スエヒロにて、第二十六回同窓会を開催致します。昨年同様、ご同伴にて沢山の皆様は是非ご出席下さる様幹事一同心からお待ち申し上げます。

近況報告

篠田庄司

米国中部に位置するイリノイ州のイリノイ大学は一八六七年に設立された州立大学で、その電気工学科の優秀さはMIT、スタンフォード大学、カリフォルニア大学バークレー分校とならび全国ビッグ四の一つといわれ、有名である。その学科には、ノーベル物理学賞を二回受けたJ・ディーン教授をはじめ百数十人以上の責任教員がいる。今回、筆者の在外研究の機に、昭和五十六年三月末から九月末までの半年間、その学科に関連した総合科学研究所に、回路理論の世界的権威であられるM・E・バンバルチンブルグ教授の招きで客員として滞在し、種々の研究を行う機会を得た。総合科学研究所は古くは制御システム研究所といわれ、

レーザやイリアックIVというコンピュータの開発を行ない、現在システムの自動故障診断技術を含めたメカトロニクスなどの研究を行なっているところである。

筆者はそのような研究所で、ネットワーク構造を持つシステム（略して、ネットワーク形システム）の自動故障診断の理論ならびに解析理論の研究を行ない、半年間という短い期間ではあったが、国際会議論文学会誌論文合わせて五編（現在すべて採録済み）を書き上げるといふ有意義な時間を過ごすことができた。米国へは昭和四八年以来五回目の訪問であったが、種々の点を総合すると今回の訪問が最も有意義であった。これからは、そこで得た知見を生かし、中央大学電気工学科の学術的、社会的地位の向上におお一層の努力をかさねるつもりである。最後ではあるが、大学にいるものが研究、教育ならびに社会奉仕に努力せずして、なんで卒業生が胸を張り、地位向上できようか！ という現在の心境を書き、筆を置くことにする。ではまた。

御挨拶

主任教授 猪狩武尚

卒業生のみなさん、いかがお過ごしですか。

電気工学諸分野の技術の多様な発展が続いている今日、皆さんには日夜新技術の研鑽に励まれていることとお察しします。

一昨年十二月の理工学部校舎の増築工事終了後、電気工学科の入っている一号館の改修工事が始まり、準備室、各研究室とも何回も工事のための移転を繰り返して、一同いわば流浪の民となっておりますが、この四月末にようやく電気工学関係の部分の改修が終わり、準備室及び大部分の研究室は一号館六館に落着きました。改修といっても壁、床、天井と扉を新しくしただけです、何よりも有難いのは電気工学科の各スペースがおよそ二倍に広がったことで、これを機会に一同心を新たに新しい電気工学科作りにつとめてゆきたいと思っております。木下先生と篠田先生はこの四月に教授に昇格され、教育と研究はもとより、電気工学科および理工学部の諸業務にも、より一層の熱意をもって活躍しておられます。また通信工学分野の専任講師として、この四月に早稲田大学大学院から小林一哉氏をお迎えしました。同氏はすでに学会において若手のホープとして活躍中であり、また教育に対する熱意も大なるものがありますので、わが電気工学科の将来のために良き人材を得たものと喜んでおります。技術員として二年半にわたって実験・研究に協力していただいた閑君は昨年九月、日本光学へ転出され、その後任としてこの三月卒業の阿波根君が四月から入職され、熱心にお手伝いいただいております。

大学の使命の一つの重要な柱は、有能な学生を育てて実社会に送り出すことです。したがって、毎年送り出した卒業生が元気で立派に活躍してくれているかどうかはいつも気になっております。

近年、電気工学科同窓会の幹事の方々の献身的なご努力により、同窓会の活動が活発になり、総会への参加者の数が年を追って増えてきております。われわれ教員がその機会に多くの卒業生の皆さんと顔を合わせ、親しく近況などを聞くことができるのは何よりも嬉しいことです。総会は先輩と後輩の縦のつながりを作る機会であると同時に、同期生の皆さんが誘い合わせて参加されれば、横のつながりのきつづなをより強くする機会にもなります。このような意味で、卒業生のみならず、同窓会の活動に積極的に協力され、毎年の総会には一人でも多くの方が都合をつけて参加して下さいることを希望します。

昭和55年度 会計報告

収入の部		
前年度よりの繰越金	2,213,333	
55年度総会々費	374,000	
預貯金利息	179,045	
名簿倍上代金	474,000	
終身会費	780,000	
寄付金	270,000	
計	4,290,381	
支出の部		
55年度総会費	508,450	
通信及び印刷費	361,000	
アルバイト代	35,340	
事務・運営費	119,560	
名簿関係印刷費	875,000	
通信費	79,450	
アルバイト代	17,296	
事務費	220	
慶弔費	750	
記念事業費	300,100	
次年度繰越金	1,993,215	
計	4,290,381	

上記昭和55年度会計報告の収支計算は適正に表示しているものと認める。

昭和56年6月13日
 弁理士 服部修一
 電気工学科 遠藤正雄

在校生と先輩との懇談会開催

同窓会の事業の一環として、在校生と共に、今後共継続してお願いできればと願っていますので、先輩方々の御協力をお願ひ申し上げます。

同窓会主催懇談会が五十六年五月八日理工学部校舎で開催された。講師は各界で御活躍の先輩にお願ひし、先ず各講師から御発言を頂き、続いて学生諸君からの質問に答える形で討論が行なわれた。就職を目前にした学生だけに活発な発言があり意義深い懇談会であった。御多忙のところ、後輩のために講演頂いた先輩諸兄に厚く御礼申し上げます。

五十五年度講師
 二十八年卒 吉江氏 (Y・H・P)
 二十九年卒 黒崎氏 (八州電機)
 三十一年卒 堀中氏 (営電K・K)
 三十一年卒 川喜多氏 (東芝半導体事業部)
 三十九年卒 田辺氏 (日立)
 四十一年卒 荒牧氏 (東芝電子技術) (遠藤記)

最近の就職状況について

教授 大類 浩

五十五年度から有馬さんと二人で学生の就職の御世話をしてきました。求人に来学されたOBの方々と種々御話を御要望に充分沿えなかった場合が多く大変申し訳なく思っております。まず始めに機会をかりて一言御詫を申し上げます。

さて、最近の就職状況についてそのあらましを御知らせすることにしよう。一般的に申しますと御案内の如くLSIやVLSIの開発と生産 Cost の低下に伴い Computer の飛躍的發展を基盤として新しい技術が開発されたりして一種の産業革命とも称すべき条件のもとで学生の就職もかつてない好況であると申してよいと思われま

業の求人件数が増加していることが知られます。それにしても件数の多いことは電気系の学生がいかに産業界に要望されているのがわかると思われ。これに対して学生の就職した企業の規模はどうかといえますと次の表のようになります。

年度	54年度	55年度	56年度
I	81+7 (88)	108+4 (112)	101+13 (114)
II	64+7 (71)	40+16 (56)	28+17 (45)
III	41+19 (60)	16+13 (29)	12+17 (29)
計	186+33 (219)	164+33 (197)	141+47 (188)

加算の第1項は1部、第2項は2部の学生数を示す。
第2表

この第二表をみると大規模企業に就職する学生数が次第に多くなってきていることがわかります。

年度	54年度	55年度	56年度
I	411	531	596
II	903	1,025	1,095
III	2,408	2,730	2,487
計	3,722	4,286	4,178

第1表

- I : 上場企業
- II : 資本金1億300人以上
- III : それ以外

これを見ますと大企業と称される企

業の求人件数が増加していることが知られます。それにしても件数の多いことは電気系の学生がいかに産業界に要望されているのがわかると思われ。これに対して学生の就職した企業の規模はどうかといえますと次の表のようになります。

られます。この事実は生産の自動化に加えて当該企業では新しい電子関係の Device を製作し始めた製品のためゆる電子化が進められつつあるための現象ではないかと思われ。いずれにせよここ二三年、学生の就職状況はこれまでになく好況であるように考えられます。一例を挙げますと大手電機メーカーはいずれも千名に近い人数を採用し、加えてそれらメーカーの子会社が数多く設立されて、これら

の会社でも各々数十名の採用計画をもっているようです。しかしこのような好況がこれから長く続くとは考えられません。我々としては、これまで卒業生諸君の努力によってつちかわれてきた本学の地盤を確保すると同時に、これを向上し且つ拡大して不況の時代に備える必要があるのではないかと考えておりますので、諸君のより一層の御支援を御願ひする次第です。

昭和56年度 同窓会総会、懇親会開催さる

昭和五十六年七月四日(土)に同窓会が新装なった母校中大理工学部で盛大に開催されました。当日は一号館六階に参集された会員並びに御家族の方々が適当な人数毎に班を組み新校舎見学にスタートし、主として五号館六号館を廻った後、五号館の大教室五三三四号室で総会をおこないました。総会終了後は五号館地階にある食堂に席を移し懇親会が開かれたわけですが、参加会員約一二〇名それに同伴の御夫人方、御家族方約二〇名と仲々賑やかに夜八時近く迄楽しく懇親の実を挙げる事が出来ました。特に今回は我が電気工学科創成時の長老である廣瀬敬一名誉

教授の御出席がえられて、先生の八十五歳という年令を感じさせぬ御挨拶には古き(?)卒業生のみならず、廣瀬先生を存じ上げない新しい卒業生諸君迄もが深い感銘を受けたようでありました。又更に今回は多くの御夫人方が参加され女性間の懇親のレベルアップも相当なものであったようで、総会後も夫人同士間の連絡等が数多くあったように伺っております。このように大成功俚に本総会が行なわれましたことは誠に御同慶にたえない次第であり、以後益々の発展が期待されます。

同窓会実行委員一同

先生との懇談会開催 常任理事会

去る二月二十五日、午後六時より、新橋「わかな」において、先生方との懇談会を開催しました。古い昔ばなしから最近の学生生活や、学問の変せんなどが話合われ、学生の教育や指導、同窓会への一層の理解を深めることができたと思われ。また、今後母校発展のために、こうした機会をたびたび

び開き、卒業生が在校生に役立つことを具体的に推しすすめることができたと考えております。なおご出席いただいた先生方は、大類、山下、吉久、猪狩、榊原、安藤、深井、小林、遠藤、木下、篠田の各先生と常任幹事の鈴木、黒崎、堀中、市川の四人です。

同窓会に入会するにあたって

57年卒 柴田健次

中央大学に入学して以来、はや4年の月日が流れ去り、電気工学科同窓会に入会することになりました。先輩の皆様、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。「歳月人待たず」という言葉がありますが、それを実感している今日此の頃です。振り返ってみれば、私達昭和五十三年に入学した者は、理工学部校舎が増築され、キャンパスの雰囲気が変わる過渡期に身を置いたわけであり、キャンパスが新たな第一歩を踏み出す瞬間を見守ってきたと言ったら大袈裟に過ぎませうか。

このような貴重な4年間を過ごした内で、多数の人々と出会い、交際の輪が広がって、「一生の友」を得た者もいることでしょう。しかし、大学の4年間では、サツクル等に入り、多少のたてのつながりを持ったとしてもよこのつながりを深めた方が多かったのではないか、と思われまふ。そこで、卒業後は、よこのつながりをより深めつつ、たてのつながりも深めるために、同窓会というものが大きな役割を占めるだろうと思っております。そして、たてのつながりが、深まり、人生の熟達者と話しができれば、大学生活では経験できなかった、別の充実

感を感じ、また時には、自分に対して行き詰まりを感じることもあるかも知れません。そのような時、同窓の方々と話しをすることによって、自己の行き詰まりを打開できるものと期待致します。また、私も何年か後には、後輩へアドバイスができるような人物になれるよう努力して行きたいと思っております。

青春の貴重な一時期、同じ電気工学科に籍を置いた、というの何かの縁でしよう。今後もこの縁を大切にしていきたいと思ひます。そして、その縁のある人々の集まりである、電気工学科同窓会に対する、私の身勝手な期待を書きました。私一人同窓会員となつたのですから、これから先は期待をするだけでなく、自分にできることでしたらお手伝いしたいと思っております。

就任のごあいさつ

専任講師 小林一哉

風薫る今日この頃、同窓生の皆様には益々御健勝のことと拝察し、お慶び申し上げます。

私は、この四月より本学理工学部電気工学科に専任講師として就任致しました小林一哉でございます。現在、応用解析・電磁気演習等の科目を担当させて頂いております。

さて、簡単に私の経歴を述べさせて頂きます。私は昭和五十二年、早稲田大学理工学部電子通信学科を卒業し、その後、同大学院理工学研究科(電気工学専攻・情報工学研究)に進学、本年三月に博士全課程を修了し、工学博士の学位を得ました。ちなみに学位論文の題目は「電磁波(光)伝送系における散乱・解析に関する解析的研究」でございますが、その内容は、近年進展しつつある光通信への工学的応用を念頭に置いた上での、各種伝送路における波動伝搬の解析であります。

今年の上上げは、業界にもよるが、13800円程度のところを決まった。思えば「イチマン・サンゼン・ハッピー・エン」のメロデーが巷に流れていた頃に卒業した。あれから二十六年、社会も、また、私自身の変わったこと、びっくり、誠に隔世の感にたえない。入社して、しばらく、現場を歩き、保守・建設・設計などに携わっていた頃は、電気技術的なものが多く、技術屋を自負していたが、最近、気付いてみると、頭の老化?のせいか新技術は若い者に任せ、我々熟年層は、管理、運用を主体とした仕事に変わり、若い人が充分に働けるように「人」、「物」、「金」のやりくりに明け暮れている。こうなると、仕事の進めるうんで、人脈だの、情報などが重要になってきて同窓会の意義が再認識される。卒業当時は、同期の中の特定の人のかわり程度しか考えていなかったが、年が経つと先輩、後輩の有難味が判ってくる。たとえば、先輩を入社させたいと願うのは人情で、その実現に向けて、先輩は執に努力するのみだ。

同窓界会

中央大学の場合、幸なことに法学部をはじめ、他学部の多数の卒業生が居り、この方法が有機的に連なり、力を結集してくれるので、同窓の有難さを一層強く感じる。今年、遠藤先生のお力添で後輩の入社が実現したが、この場合も然り、見えない空間に力の働く電界ならぬ同窓界会の存在を知った。

北海道電力(株)山口岩男

中国に出張

堀中武和

昨秋十一月中国の上海・北京を廻る機会を得た。私には二度目の訪中で前回は一六五五年で十六年目の訪中である。前回は北京工業展覧会の技術説明員として技術交流会をもち、今回は小社の製品納入（上海電視一斤に信号設備一式）の立会としてである。この間にあの文化大革命・日中国交回復と大きな変革があった。

成田発九〇〇JAL795便、長崎経由上海、長崎を発つて間もなく海面がまっかになる。長江の流入の雄大さを示している。上海は中国一の大都市であり国際都市でもある。古い街並の中に新しい住宅（アパート）が見受けられる。作業は順調に進んでおり二日後より立会検査に入る。日本で一度おこなった検査と同じ項目を性能の再現性を見ながら一項目づつついでに確認していく。責任者の張さんは体調が悪いのもかゝらず出社されて立ち会われた。若い人に理解しにくい問題はていねいに説明同意を求めるともしばしば。国は異つても人と人の間に相互信頼状態が保たれて始めて仕事はスムーズに運ぶもので不安をなくすために多少の時間を費しても得心のいく説明会を行う。四日間の検査が終つて次は説明会を約一年半に渡ったこの工事インをもらつて約一年半に渡ったこの工事の一段落する。彼等の仕事は一見ゆっくりの様に見えるが着実に進んでいる。中国との仕事は組織の違いもあり仕様書段階で余程固めておかないと見解の相違などで話がつれることがある。担当者の了解が得られ

ても組納全体としての理解を得るのは大変で留意すべきである。町には食料品、衣料品は豊富でカメラ、デジタル時計もウィンドーに並んでいる。若人のなやみは住宅でそのため結婚を延ばすこともあるそうである。

二十七日CA便で北京へ、中央電視台の人々と会うために、思いがけず馬さんさんが空港に迎えに来てくれる。十六年目の再会であつたかといふ限りである。帰国迄の三日間昔の友人達が各所を案内してくれたり、技術的な話し合いをする。現在北京ではテレビは第二チャンネル（全国ネット）第八チャンネル（北京ローカル）を一〇KWで放送している。全国ネットは一九七一年より約十年がかりでマイクロ回線を完成させており、現在新疆とチベット地区を除いて全国放送を行っている。TV送信機は上海製と北京製でUHF（上海）一局のみ日本製のもので実験的に使用している。北京には新しい放送局を計画中で、出力五〇KWを予定しているとのこと、こんな話をしていくと十六年のギャップは吹き飛んで夜の更けるのも忘れて話し込んでしまう。二十九日また馬さん等に見送られて北京をあとにする。然し前回に比べて服装も明るくなったし街行く人々の表情が明るくなつた様に見受けられる。もともと印象深いのは広告のキャンパンが街角に立っていること、それも日本のメーカーのものが目立つこと、以前には考えられなかったことである。前回は広州・香港を経由して二日間の日程が、今日は四時間成田へ。中国には十億の人民と三千年の歴史がある。日本とて古くから関係深い大きな隣国である。その永い歴史の流れの中で人々は着実に一歩一歩近代化を進めていることを忘れてはならない。（菅電機）

「研究室紹介」

同窓会誌を通じて我が理工学部電気工学科の研究設備並びに研究内容を順次紹介したかどうかということ、先ず最初に高気圧実験室を御紹介することになりました。科学技術が急速な進歩を遂げている中で、多分に古く、特殊分野の研究室ですが、年を追って最新の研究室も御紹介できることを御期待頂きたい。そして、大学施設の中で貴社の研究内容から見て役に立つものがあれば、御利用頂くことも可かと存ずる次第です。

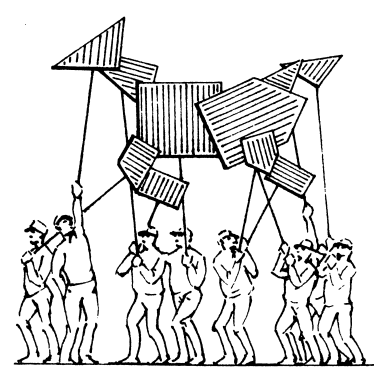
設備購入の概要を申し上げますと、文部省から私学に対する特別研究設備補助があり、中央大学（理工学部）はその私大の中でも有数の実績をもっております。電気工学科も何件かの特別助成金を頂いて設備充実に大いに役立っています。先ず三十八年度に「高電圧発生装置」を充実し、四十六年度に「単結晶製作装置」を購入し、五十五年度には「絶縁破壊現象実験装置」を購入しました。更にこの間文部省からのその他の補助金による実験装置も多数購入しています。

次に五十五年度購入「絶縁破壊現象実験装置」の概要は次の通りです。

①イメージコンバータカメラ
露光時間 10ns
インターフレーム 50ns
全記録時間 800ns

駒撮りの場合

流し撮りの場合
スピード
最大記録時間 7.5μs
②イオンエッチング装置
中性のビームにより材料表面をエッチングするもので、日本では有数の最新鋭の装置
取り敢えず高速度カメラと材料試験のための装置を紹介しました。
(文責 遠藤) 以上



編集後記

毎年会誌の編集にあたって、ニュースが不足で困っております。全国各地で活躍の三千名を越える同窓の士にぜひ紹介したり、語りかけたモノ（ニュース・写真）を係までお送りくださいます。しめ切りは、毎年四月末日とします。
市川記